

幸せになる 三つの キーワード

アルボムッレ・スマナサーラ

お釈迦様は私たちに、「幸福な生き方」、本当の生き方を説かれました。人間がみんな、豊かで幸せで楽しく平和に生きたければ、これこそがその道だよと、本当に幸せに生きる道を教えられたのです。

最後の挨拶

お釈迦様は、亡くなる三ヶ月前に身体を維持する力のスイッチを切って、「もうそろそろ涅槃に入りますよ」と宣言なさいました。それから残っていた体力もどんどん使い切り、最後にはとても衰弱して、とうとう歩けなくなりました。

マツラ国の、サーラという樹が二本（沙羅双樹）あるところで、アーナンダ尊者に「もうこれ以上歩けないから、ちょっと横になりたい。衣を敷いて下さい」とおっしゃいました。アーナンダ尊者は、言われた通り、そのサーラ樹の下に衣を敷いて差し上げたのです。

樹の下と言っても、ただの地面ですよ。その地面に、厚くもない、ただの衣を敷いてもらって、そこに横になって、もう立ち上がらないのです。お歳で動けないのです。

お釈迦様が、横になったまま「これでもう終わりです」とみんなにおっしゃいましたので、もう、あっちからこっちから人々が来て、みんながお釈迦様に最後の挨拶をしました。

サーラ樹の下で何日いらっしゃったかははっきりしてないんですけど、おそらく二、三日か四日くらい、そのまま横になっていらっしゃったと思います。その間ずっと、いろんな所から、人々が最後の挨拶をしに、来るわ来るわ、きりがなかったのです。

考えてみてください。話す気力もない、体力もない、もう最期の息を引き取ろうとして横になっている人の所へ、次から次へと人々が来て、行列を作って、挨拶する順番を待っているのです。気の毒ですよ、ちょっとそっとしておいてあげればいいのに。それでもお釈迦様は、一人一人にひと言ひと言、みんなに声をかけてあげたのです。

悲しみを取り除く

アーナンダ尊者は、お釈迦様のお世話と、面会に来る人々の管理などをするのがお仕事でした。お釈迦様の身の回りの面倒はみな、アーナンダ尊者がしていて、お釈迦様の身体に触れたりすることは、彼以外には誰にもできなかつたのです。そのアーナンダ尊者が、やっぱりお釈迦様のことがすごく好きで慕っていましたから、「お釈迦様の命はもう延ばせない、亡くなるんだ」とわかつたところで、いても立ってもいられなくなって、出て行ってしまいました。どこかですごく泣いているんです。

そうすると、お釈迦様は亡くなりそうで大変なのに、人々もどんどん挨拶に来るのに、付いてくれる人は誰もいない。「アーナンダはどこですか」とお釈迦様が尋ねると、お弟子たちは「アーナンダ尊者はもう、誰が話しかけても返事もしないで、泣き崩れています」と。お釈迦様は「まあそれでも、彼を呼びなさい」と言って、側に呼んでもらいました。

それで、アーナンダ尊者に話をしたのです。「アーナンダ、あなたは どうして泣くんですか。死ぬことはもう、誰にでも決まって起こることでしょう。こんなことで泣いて、どうするんですか。ずーっと私のことを心配して、付きっきりで私の面倒を見てきたあなたには、これから大きな責任があるのではないですか。泣き崩れている場合ではないでしょう」と、お釈迦様が亡くなるまでの最後の仕事や、亡くなってからの仕事など責任感を思い出させてあげて、何とか立ち直ってもらったのです。

最後の挨拶より大事な仕事

お釈迦様のご臨終というニュースを聞いて、マツラ国やその周辺にいた偉い人々や王様やら、誰もがお釈迦様の所に駆けつけました。あちこちで修行していたお坊さんたちも、みんなやって来て挨拶をしました。ところが、一人のお坊さんだけは、お釈迦様の所へ行きませんでした。名前はダンマーラーマ。彼だけただ一人で、自分が修行していた所でそのまま樹の下に坐っているのです。

それを見た他のお坊さんたちは「何という失礼な態度ですか」と思ったのです。まだ悟っていないお坊さんたちですけど、「私たちはこんなに悲しがっているのに、このマツラ国の人々もみんな悲しがっているのに、王様たちも泣いているのに、あの人の態度は何なのか。しかも出家で、お釈迦様の弟子なのに」と、ダンマーラーマさんのことをすごく非難したのです。それだけでは我慢できずに、お釈迦様にも報告したのです。「お釈迦様、ご存じですか、私たちはこれほど悲しがっているの

に、ひとりの坊主は全然挨拶にも来ないし、ずいぶん気楽に勝手に生活しているんですよ」と。

みんながひどく非難しているので、お釈迦様は「そう、じゃあその比丘を呼びなさい」とおっしゃいました。「お釈迦様がお呼びですよ」と呼ばれて、そのダンマラーマというお坊さんがお釈迦様の所に行きました。

お釈迦様が「本当ですかねえ、君は私が今涅槃に入ることについて、何の関心も悲しみもなく、勝手気ままにわがままに生活している、という話がありますが」と尋ねますと、そのダンマラーマさんは

「お釈迦様、それはちょっと違います。お釈迦様が今日か明日にも涅槃に入られることは私も知っています。だから私は、お釈迦様が涅槃に入られる前に、完全に悟りを開きたい、解脱を経験したいと、必死で修行しているのです」と応えたのです。するとお釈迦様は、パーリ語で「サードゥ、サードゥ、サードゥ」と、「素晴らしい、素晴らしい、素晴らしい」と三回おっしゃったのです。「なんて素晴らしい、善いことか」と。

そしてみんなに向かって「私のことを心配する者がいるならば、このダンマラーマです。ダンマラーマこそ私のことを心配して、私のことを大切に思っているのだ」と宣言されたのです。

「みんなは花を持って来たり、お供え物を持って来たり、あらゆる音楽を奏でたり、いろんなことをやっていますが、そんなものは何の価値もない」と、みんなを戒めて、ダンマラーマさんのことは「世尊（お釈迦様）のことを誰よりも尊敬する人だ」と、お釈迦様は誉め讃えたのです。

最後の最後にまで、そういうエピソードが経典には残してあるのです。このエピソードがなぜ残されているかと言いますと、これは、お釈迦様の大切なメッセージだからです。お釈迦様は我々に「善い人間になりなさいよ」と、ものすごく苦労して教えて行ったのです、まさに涅槃に入ろう、亡くなろうというその時にまで。

無一物の生涯

八十歳で亡くなるまで、お釈迦様はずーっと裸足でおられました。私もバカなことを妄想しますが、お釈迦様がもし草履を履いたら、どんな感じでしょうかなどと想像します。お釈迦様に草履を作ってくれる人がいるとすれば、どういう人でしょうか、とか、どんな形の草履になるでしょうか、などと考えてみたのです。

でも、やっぱり偉大なるお釈迦様にふさわしい草履なんかは、人間には作れるはずがないでしょうね。元々すっごく贅沢に育てられた王子様でしたから、そこらへんの安っぽい草履なんかを履いちゃうと、かえって問題になるかもしれません。だからたぶん、お釈迦様はずうっと裸足でおられたのだと思います。

私でさえも草履を履いているのに、お釈迦様は、ずっと裸足だったのです。私は別に贅沢に育てられたわけでもないし、王子どころか、食べ物があったらそれでありがたいというくらいの経済状態で育てられたのですが、それでもちゃんと草履を履いています。

お釈迦様は草履も履かないで、インド全土をずうっと、ほとんど全国を歩き通されたのです。アスファルト道路があったわけでもないし、逆に「できるだけ近道で次の国へ行くぞ」と、わざわざ山の中を登って、藪を通って行くのです。そういうふうに行って、時には食事ももらわない。時には人々にもものすごく侮辱される。それでも全然構わない。全く平然と、どこにでも裸足で行く。

一生涯、早朝から夜明けまで働き詰め

お釈迦様もお弟子さんたちも、食事は一日に一食だけでした。朝に托鉢に行かれるのですが、ものすごく早い時間に村に入ります。なぜかと言いますと、朝早い時間には、村人はまだほとんど寝ているのですが、早朝に人目に付かないように仕事をする人々がいるのです。召使いとかカースト身分のすごく低い人々が働いているのです。不可触民族やら、カーストが一番低くて差別されてる人々や、召使いの奴隷の人々が、その時間にあちこち水を汲んだり、金持ちの家の便所を掃除したり、いろんな仕事をしている。

その人々は、一般の人々が目覚めてご飯食べて仕事を始める頃にはもう下がっていなくちゃいけないのです。もう道路に出られないのです。お釈迦様は、朝早く村に入って、その人々に会うのです。会って言葉を交わして、説法したりする。

そういうことは、経典にも僅かしか記録されていないのです。なぜ記録が少ないかと言いますと、それがお釈迦様にとって毎朝の、あまりにも当たり前のことだったからです。全く同じ内容の出来事でしたから、繰り返し記録する必要はないのです。

夜は夜で、お坊さんたちに話しかけたり説法したりして、ずーっと起きているのです。時には徹夜して話す。夜、お釈迦様が説法を始めて、お坊さんたちも元気で頭が冴えて話を理解する状態だったら、そのまま

朝までずーっと話し続けるのです。

だからといって、徹夜したんだから朝寝坊しようかなということはないのです。朝はまた、とても早く出かける。出かけてそこら辺で仕事したり歩いている人々に会って話をしたりする。その人々が街路から立ち去ったら、お釈迦様は托鉢して、ご飯を召し上がる。普通の人々が街路に出てきたら、また説法したりして、午後になったら村外れの精舎に戻る。

お釈迦様が精舎に戻ったら、お釈迦様は今あちらにいらっしゃると、村人はみんな知ってますから、それでまた、会うことのできなかつた人々がお釈迦様の住んでおられる所に行く。そして夜まで質問に応えたり、説法したり。

お釈迦様は、一日中忙しかったのです。一日一時間半しか、横になってお休みになっていなかったのです。そしてそれを、一生涯ずーっと、当たり前のように続けてこられたのです。お休みはなし。どれほど仕事をなさったと言えはいいのでしょうか。そうやってずーっと、亡くなられる最後の最後まで、教えられたのです。

お釈迦様の唯一の願い

そのお釈迦様のたった一つの願いは、「善い人間になれ」。ただそれだけです。「しっかりしなさい、心清らかにしなさい、悪いことやめなさいよ」と、ただそれだけ。

「私を拝みなさい、崇めなさい」などというようなことは、全くおっしゃっていないのです。実際には我々は、お釈迦様のことがありがたいですから拝んでいますし、何か法要などをしても、派手に太鼓を叩いたり音楽を奏でたり、やりたい放題やりますけど、それは我々がアホだから勝手にしていることで、お釈迦様は本当は、そういう騒ぎや人を崇めることは厳しく禁止しているのです。

普通の世界では、何かをしてあげる代わりに、何かをちょっと求めることは、当然あるんですよ。自分が何かをしてあげないと、自分にも何もしてくれないというのは、当たり前のことです。

お釈迦様はそうじゃないのです。お釈迦様には何も要りません。もう完全なる解脱を得ているのですから、何も要らないのです。草履一つも要りません。疲れて寝たいとも思いません。身体を維持できる最低限だけ、食を摂り、身体を休めてあげるだけ。

お釈迦様は「私は、自分で完全に幸せになっているんだから、何も要りません。ただ、あなたは善い人間になって下さい。あなたは立派な人

間になって下さい。あなたは幸福になって下さい。それで充分。終わり」という態度なのです。

皆様は聖書をお読みになったことがあると思いますが、聖書では神様が「私を誉め讃えなさい、私を信仰しなさい」と言っているんですよ。神様でもやっぱりそういうふうに、自分が何かを要求する、自分に何かをしてくれることを期待する気持ちはあるのです。「私のためにあれをやれ、これをやれ。私のために生きなさい」とかね。

仏教以外は、どんな宗教でも、そういう気持ちが激しくあるのです。だから、例えば神様を信じている人々は、神様のために生きて、神様に全てを差し上げて、神様のために命まで捨てたりして、すごく犠牲になるのです。

仏教の場合は、全く逆なのです。お釈迦様には何もあげなくてもいい。何も要らない。

その代わり、私たちがほんのちょっとでも善いことをすると、お釈迦様は、それをとっても喜ぶのです。たった一人でも「お釈迦様の教えの通りに頑張ろう。心を清らかにしよう」と努力すると、お釈迦様は、素直に、すごく喜ぶんですよ。それがまた、みんながお釈迦様のことをすごく大事にする、一つの原因なのです。何も大げさなことをしなくても、「お釈迦様がおっしゃったのだから、これは守りましょう」と、ちょっとした善いことでも頑張ると、お釈迦様は「それは本当に善いことです。素晴らしい」と、思う存分誉めてあげるのです。

私たち自身が幸福になることが最大の供養

今はお釈迦様はおられないのですが、お釈迦様がおられたらきっと喜ぶだろうという善いことをしたら、まず我々自身が幸福になって、元気になります。ものすごく力強い人間になるのです。

「あ、私が今やっていることは、お釈迦様がおられたら、きっと喜んで下さるでしょう」ということができれば、まず私が、堂々と元気で生きていられるのです。

私たちが立派な人間になることが、お釈迦様に対する、仏法僧に対する、大いなる尊敬・供養なのです。お寺に多額の寄付をするよりも、お金をかけて派手な法要をするよりも、「自分が心を清らかにしよう、善い人間になろう、もっと優しい人間になろう、これはお釈迦様がおっしゃったことではないか」と頑張ると、それこそが、仏陀に対するこの上ない尊敬・供養になるのです。

お釈迦様に勝った女の子の話

1 仏陀が決めたなら誰にも止められない

お釈迦様は何も要らないし、何も怖いものはありませんから、人々のために一旦こうしようと決めたら、どんな悪魔に脅されても、どんな王様に懇願されても、決してその心を曲げません。でも、たった一人の小さな女の子に負けて、その子の言うことを聞いてしまったことがあります。

お釈迦様がお弟子たちとコーサラ国の舎衛城（サーヴァッティ）の精舎で雨期の三ヶ月間を過ごされた後、また遊行するためにそこを出発しようとしておられた時のことです。舎衛城では、アナータピンディカ居士というかなり裕福な信者さんが、お坊さんたちのお世話をしていました。パセーナディという王様も熱心な信者でしたし、ヴィサーカ夫人というすごいお金持ちの女性の信者さんもいて、みんながお釈迦様のお世話をしていました。お釈迦様は舎衛城にいる時だけは結構気楽に生活できたのです。国はほとんど全体的に仏教で、国にいる豊かな人々はみんな仏教徒で、みんなが仏教を支えてくれるのです。ですから、お釈迦様が舎衛城に滞在された日数は結構多かったのです。でも、出て行くと決めたら出て行く。

お釈迦様が出て行ってしまったら、みんな、ものすごく寂しくなるのです。お釈迦様が滞在していらっしゃる時は、みんなたいへん元気で、一日も怠けることなく仕事も頑張って、てきぱき仕事を済ませ、すぐにお釈迦様のおられる所に行って説法を聞いたりする。休みの日には徹夜して修行・瞑想したりして、すごく張り切る。それでとても元気になるのです。

お釈迦様が出て行ってしまおうと、ただもう、ご飯食べて仕事をして寝るだけの世界だから、おもしろくないんですね。だからお釈迦様にいて欲しかったのです。それで王様が来て、「お釈迦様、もう一年、我々がお布施いたしますから、どうかこちらに留まって下さい」と頼みました。でもお釈迦様は、ただ一言「仏陀が行くと決めたのです」と。

この「仏陀が行くと決めた」ということは、もう誰が何を言っても考えを変えることはありません、という意味なのです。人間なら、王様に頼まれたら、王の命令だからすぐに従いますけど、お釈迦様は「仏陀が出かけると決めたのです」の一言で終わり。もう誰にも止められない。だから王様はすごくうちひしがれて帰りました。

アナータピンディカ居士もお願いしたのですが、やっぱり認められま

せんでした。それでアナータピンディカ居士は落ち込んで、「お釈迦様がいなくなっちゃう、悲しい」と、寝込んでしまったのです。

2 仏陀の教えを歩む人に仏陀が道を譲る

アナータピンディカ居士の所に、一人の小さな召使いがいました。ご主人が寝込んでしまったので、「だんな様はどうしたのでしょうか。ご病気でしょうか」と尋ねたのです。そうすると「病気じゃないんだけど、元気がないんだ」と。「なぜですか」と聞いたら、「お前たちには関係ないことだよ。お釈迦様が出かけることになったのだ。行ってしまわれたら、次はいつ戻られるのか、もう何年経ってからお帰りになるかも分からない。だからすごく寂しいのだよ」と言ったのです。

するとこの女の子は、「そうですか、では私がお釈迦様に頼んでみます」と、何のことなく言うのです。居士は「お前は召使いで奴隷の身で、そんな大胆なことをお釈迦様に頼めるわけがないでしょう。お前の言うことを聞くどころか、お話しする機会も得られないかもしれないよ。国王もお釈迦様にお願いしたけど断られたんだよ」と言った。するとその女の子は「ではだんな様。私が頼んで、もしお釈迦様がもう一年留まってくれたらどうしますか」と言う。「お前にそんなことができるならば、私の娘にしてあげますよ」と居士は約束しました。召使いの奴隷をいきなりその家の娘にしてあげるということは、大変なことですね。

女の子は何のことなく、「わかりました」と言って、そのまま走って行きました。

今もインドに史跡がありますが、アナータピンディカ居士の家からお釈迦様のおられた精舎まで、それほど距離はないのです。で、女の子は走って行ったのです。小さな女の子ですから、誰も気にしません。

で、お釈迦様はやっぱり、出かける準備をしているのです。お坊さんたちもみんな準備して、精舎の戸を全部締めて、荷物も片づいて、ちょうど出かけるところです。そこにこの子が走って行ったのです。ささっとお釈迦様の所に行って、お釈迦様に頭を下げた挨拶して、何のことなく「お釈迦様、どこかへいらっしゃるのでしょうか」と聞く。

お釈迦様も気軽に「うん、もうこれから出かけるよ」と。女の子は「お釈迦様、そんなこと言わないで、もう一年こちらにいらっしゃって下さい」とお願いする。まあ子供の頼みというものはそんなものだから、「こちらにいらっしゃって下さい」と、ストレートに頼んだのです。

するとお釈迦様は、「では、私が留まったら、君は何をくれるんですかねえ」と、この奴隷の子に聞くんですよ。留まってもらうからには、

お布施とか、一応、留まることをお願いした人が、責任として一日一回の食事くらいは差し上げることになっています。それを一年間続けるのですから、大変です。

ところが、この女の子は平気。「そんなこと言ったって、私は奴隷ですから、あげられるものは何もありません。でもお釈迦様、もしもう一年こちらにいてくださるなら、私は五戒を守ります。約束します」と。

子供の話ですよ。でもお釈迦様は、「あ、そう。君、五戒を守ってくれるの。よしわかりました」と言って、「比丘たち、みんな戻りなさい」と、今にも出かけようとして足を踏み出していたお釈迦様が、また精舎に戻ったのです。お弟子たちも全員引き返しました。

お釈迦様は王様に「仏陀が行くと決めたのです」と言いました。それにはもう一言、言わなくても暗に含まれています、「それを変えることは、神々であろうと、梵天であろうと、悪魔であろうと、この世の中で誰にもできません」と。

仏陀が決めたことを変えることは、誰にもできないのです。王様はそれを知っていましたから、「さようでございますか。残念です」と言って、引き下がるしかなかったのです。

それを、この奴隷の女の子が、いとも簡単に変えさせたのです。この子の一言で、「君、五戒を守ってくれるの。では留まります」と、お釈迦様があっさり言うことを聞いたのです。それでもう一年留まることになったのです。

女の子はさっさと走って帰って、アナータピンディカ居士に「だんな様、お釈迦様はもう一年留まることに決めましたよ」と報告しました。アナータピンディカ居士も預流果に悟っていましたから、冷静に「お前はどうかお願いしたのでしょうか」とか聞いたかもしれませんが、女の子も、私はこういうことを言いましたと話したでしょう。それを聞くと、アナータピンディカ居士にもよく分かったのです。お釈迦様がどれほど、我々が善い人間になることだけを期待しているか、ということです。

聖なる母・聖なる父

五戒とは、・殺さない、・盗まない、・邪な行為をしない、・嘘を言わない、それから・酒・麻薬は使わないという五つです。これをその女の子一人が守ったからと言って、お釈迦様には何のこともないでしょう。でも、その子はそれで立派な人間になる。それで悟りを開ける可能性もある。その子にとっては、それが最高に幸せなことなのです。だからお釈迦様が「だったら留まりますよ」と。それくらい、お釈迦様は我々の

ことを心配するのです。

お釈迦様ほど、人間のことを心配した人は一人もありません。人間のことでなく、神々も動物も、全ての生命のことを、心配していたのです。ですから、我々が頼りにするとしたら、仏陀以外には誰もいないのです。

だから昔の人々は、殺されたって仏陀の言うことには逆らわなかったのです。「お前があいつを殺さないなら、俺がお前を殺すぞ」と脅かされても、「じゃ、どうぞ殺して下さい。お釈迦様が殺されても殺すなどおっしゃった。その真実には逆らえません」と。それくらい、お釈迦様のことを信頼するのです。

私たちの国・スリランカでは、お釈迦様のことを「お釈迦様」とは呼びません。いつも「聖なる母」とか「聖なる父」と呼ぶのです。スリランカの言葉では「聖なる母」と言えば、お釈迦様のことなのです。別にお釈迦様は女性ではないのですが、「聖なる父」と同じことで、自分の父親・母親という感じで、「それくらい我々のことを心配してくれるのだから、文句言わずに仏陀の言うことを守ればいいや」と、教えを守るのです。

汚れた思考が不幸の源

守ると言っても、お釈迦様は、私たちが守り難いことは全然言わないんですよ。すごく簡単なことを教えているのです。その簡単なことが、大変な真理なのです。ひとつ紹介します。

お釈迦様はこういうことをおっしゃいます。

「汚れた考え方を止めなさい。間違った考え方を止めなさい。清らかな正しい考え方をしなさい」と。

ま、考えることだけだから、簡単でしょう。きたない、醜い、汚れたことをごちゃごちゃ考えるんじゃなくて、すごく美しい清らかな考え方をして下さいということです。

難しい？ 難しくありませんね。それだけで、たちまち素晴らしい人間に生まれ変わるのです。考え方を変えただけで、この世の中で、何でも自分の希望通りに、期待通りに、うまく行くのです。

死んでから天国に往くのも地獄に往くのも、考え方次第です。殺してやりたいとか奪ってやりたいなどと地獄の生命と同じような思考を持っていると、死んだら地獄に引っ張られてしまいます。動物と同じ思考していると、死んだら動物の世界に引っ張られます。楽しく明るく穏やかで神々と同じ思考パターンでいると、死んだら神々の世界に引っ張られる

のです。お釈迦様やお弟子たちと同じ聖なる思考でいると、そういう聖なる世界に引っ張られるんですよ。

全ては思考次第なのです。だから、とっても簡単でしょう。

幸せになる三つのキーワード

1 第一のキーワードは「欲」

それだけでも簡単なんですけど、お釈迦様はさらに簡単にしてくれるのです。汚れた思考は三つだよ、と。三つのことにだけ気を付ければ、それでよいのです。

まず一番目は「欲」に関わる思考。

欲に関わる思考とは、できるだけ儲かりたいなどと考えることです。商売をしているなら、売り上げのことばかり考える、もっと店を大きくしたい、全国に店をどんどん広げたいなどと、きりがなく儲かることを考える。それが欲に関わる思考です。私たちは俗世間に浸り込んで、朝から晩までそのことばかり考えています。一日中、俗世間に溺れている。それだけで心は、結構汚れているのです。

儲かりたいと儲からない

儲かりたい、儲かりたい、と思っただけでは儲かりっこありません。それどころか、あまりにも「儲かりたい」という気持ちでいると、心が鬼になっていますから、みんな嫌がって逃げていくのです。それで儲からなくて赤字になるのです。

不思議なことに、「儲かりたい」という気持ちが消えたところで儲かるんですよ、おもしろいことに。

商売していても、別に「儲かりたい」という気持ちじゃなくて、商売という仕事が楽しくてやっている。すると、お店に来るお客も楽しいし、商売がみんなの役にも立つのです。元気一杯で「みんな私の店で売っている品物を待っている、信頼している。みんなを裏切ってはいかん。よい品物をみんなに提供しなければいかん」と、ありがたいという気持ちで店をやっていると、別に一割引セールとか、一個買えば二つおまけするとか、そんなくだらないことしなくても、何のことなく売れますよ。

だいたい、商売が成功する人は、結構明るく元気で、それほど欲がないんですよ。ただ怠けたくないだけの話で。

日本にも、ものすごくお金が儲かっている有名な人々がいるでしょう。

テレビでそういう人々の話をよくやっていますが、この人たちにはこんなにお金があってどうするのかという気もしますが、話を聞いてみると、本人たちは「お金はどうでもいい」という感じにいるのです。お金があり余って、「じゃ、もうひとつ新しくホテルでも作ろうかな」ということになるのですが、ただ怠けていたくないから新たに拡げるだけの話なのです。てきぱきと動いて、若者を雇って、みんなに仕事を覚えさせて、働いてもらうのが好きなのです。

そうすると、みんなも助かるでしょう。若者をものすごくたくさん雇って、礼儀正しくお客さんに対応することをしっかりと教えてあげるのは、お母さんが教えても、若者は聞いてくれないでしょう。でもそういう人たちの話は聞くのです。だから、若者にとってもありがたい話です。お客も、生き生きと働いている若者にお世話してもらって喜ぶ。だから、どんどんますます儲かってしまうのです。

財産なんてちょっと預かっているだけのもの

お釈迦様は「欲に関わる思考はあんまりしない方がいい。それは汚れている。代わりにこんなふうに考えなさい」とおっしゃって、自分に財産があっても、「これも生きていく間だけのことで、それももしかすると台風が来て持って行ってしまいかもしれませんし、地震が来て飲み込んでしまいかもしれません。それぐらいのものだから、あまり執着しないでいた方がいいのだ」と思いなさいと教えておられます。

例えばお嫁に行って、その家に財産があって、「よし、これで私の財産だぞ」と思ったら、姑さんにやられてしまいます。そうじゃなくて「まあここで一緒にいる間に、仮に使うだけのものだ。こんなものは私のものじゃないんだ。他人様のものだから大事に守ってあげよう。どうせ私も歳取って死んじゃったら、自分のものでも何でもないんだから」と、そういうふうに考えなくちゃいけないんですよ。そう考えると、信じられないくらいうまくいくのです。

日本では当たり前のように言われていますが、姑と嫁のけんかは、全く信じられない話です。あり得ないことです。お嫁さんに行ったら、ただまあ「ちょっとこの家にいさせていただく」という感じでいればいいのです。どうせ我々のこの人生といっても、世の中にちょっといさせていただくだけのことでしょう。どこにいても、せいぜい六十年、八十年間ぐらいの一生で。それなのに「私のものだ」と思ってしまくと、最悪の状態になるのです。だからお嫁に行っても、財産が突然回ってきて、「あー、ダメダメ、これはちょっと預かるだけの話だ。こんなものに足

を引っ張られては困る。私は死ぬ時には気楽に死ななくちゃいけないんだ」と、欲のない気持ちでいなくちゃいけない。

気楽に死ぬどころか、我々は死ぬ時でも、「この財産をあの人に取られたら困る」とか考えて、遺言書まで書く。死んでも離れない。でも死んだらどうしても離さなくちゃいけないんだから、遺言書を書いて、まだ欲を振り絞る。

まあ遺言書を書くのは悪くないんだけど、遺言書を書くなら、「私が死んじゃったら、このゴミ（財産）に対して兄弟がけんかするだろう。そうならないよう、みんなに均等に適当に入るように、みんなけんかしないように、なんとかしなくちゃ」という優しい心で書く。それは素晴らしいことです。

たとえば、すごく体の弱い子供がいて、すごく体力もある、商売もできる子供もいるなら、親としてはやっぱり体の弱い、あまり収入もない子供を、もうちょっと助けてやりたい気持ちはある。遺言書を書かずに死んでしまったら、みんなに同じ分配ですし、弱い人のものも、兄弟が「お前にはそんなに要らんでしょ。私たちが面倒見るんだから、お前の分を私に預けて下さい」と奪う可能性もある。その場合は親は親の気持ちで、「やっぱりこの子は弱いんだから、もうちょっと余分に。あいつは立派に商売できるんだから、自分で頑張ってください」というふうに書いてもいいんですけど。

そうでなく、ただ、死んでからも財産を管理したがることは、よくない思考。財産に対して、家族に対して、親戚に対して、自分に対して、ああしたいこうしたいなどと考えることが、お釈迦様がおっしゃる、汚れた思考。そんな思考で人生をダメにしてはいけません。「家族も財産もどんなものでも、みんな結局、捨てて去るものだ。それを知らないのは愚か者だよ」という気楽な気持ちでいる。ただそれだけのことで、心は立派に清らかになります。

2 第二のキーワードは「落ち込み」

気を付けなくてはいけない二番目は、「落ち込み」。ちょっとしたことで落ち込んでしまう心にも気を付けなさいといけません。

台風でちょっとやられちゃうと、「はあーだめだ」と落ち込んだら。そういう、ちょっとしたことで落ち込むことをやめる。「落ち込み」は、「欲」から生まれる「怒り」の心です。「せっかく家を建てたのに、台風で屋根が飛んでしまった。私はなんて不幸な人間なんだろう」などと、あって欲しいものがなくなったり、うまく行って欲しいことに失敗

したり、欲が満たされなくて起こる怒りの感情です。

落ち込む必要なんかないのです。「ま、家には縁があって建てること
ができたけど、屋根にはあまり縁がなかったのでしょうか。雨が漏るのも
困るから、トタンでも屋根を付けておきましょう」という感じで、屋
根は飛ばされてしまっても、自分はすぐに立ち直ればいいのです。

たとえ自分の親や子供が死んでしまっても、「縁がなかったんだから、
しょうがない」という感じでいなくちゃいけないんですよ。だって、そ
れが事実でしょう。いくらかわいい子供でも、その子には業がなくて、
長生きする徳がなくて、あるいは過去世で何か悪いことをして、その
結果として、突然誰かに殺されるか、事故で死ぬか、ということが現に
あるでしょう。これを、母親がどうして一生泣き続けなくちゃいけない
んですかね。母親にも、子供を成長させて、一人前にして、社会人にし
てあげて、結婚もさせてあげて、母親の喜びを味わうだけの縁がなかつ
たのです。子供にも長寿の縁がなかった。だから「縁がない。まあしょ
うがない」と考えて、また気楽に生きればいいのです。それしか、人間
に考えることはないでしょう。

それは残酷な考え方ではないのです。執着のない考え方なのです。逆
も同じ。子供が長生きして、立派に成人して、すばらしい社会人になっ
たとしても、母親は「私が育て上げたぞ」などと威張ったり自慢する必
要はないのです。頭が良く、性格が良く生まれてきて、みんなに愛され
て、社会で立派な人間になったのも、その子自身の良い業のお陰でしょ
う。だからお母さんが威張っても意味はないのです。

そういうふうに、みんな自分の業と縁で生きているのですから、そこ
を考えて、あまり落ち込むことをしない。

怒ることもしない。「あれは嫌だ、この人は嫌だ」などと絶対思わな
いしていると、その心はきれいなのです。

3 第三のキーワードは「暴力主義」

気を付けなければいけない三番目があります。「暴力主義」。よくよ
く考えると、この世界、人類は、暴力主義なんですよ。非暴力主義者は、
滅多にいない。この「暴力主義」という心が、とんでもない心の汚れで
す。考え方自体が汚れている。

「悪いことをした人にはちゃんと罰を与えなくてはいけない。殺さな
ければいけない」という考え方は、結局「暴力主義」の思考なのです。

アメリカでテロ行為をしたのは、サウジアラビア人のビン・ラディン
という人だという話がある。ビン・ラディン自身がやったのではないん

ですけど、彼のグループの誰かがやったという噂なんですね。それでアメリカは軍隊を出して、サウジアラビアとものすごく仲が悪いイラクという国のフセインを殺そうとする。イラク人を一万人以上も殺している。それでビン・ラディンがすごくひどい目に遭うという計算らしいですけど、変な計算ですね。

単なる「暴力主義」です。誰でもいいから殺しましょうということでしょうね。仏教では、たとえビン・ラディンでも殺してはいけませんよ。ビン・ラディンがテロで人を殺したかもしれませんけれど、それはとんでもなく出来の悪い人だからそんなことをしたのかもしれません。あるいは、あのテロはテロで亡くなった人々に対する怒りではなく、アメリカに対する怒りでやったことですから、アメリカ政府もそれなりの、ビン・ラディンが腹が立つことをしていたでしょう。ですからお互いに自分の過ちを正せばいいことでしょう。「あなたの権利を私は奪いません。あなたも私の権利を奪わないで下さい」という単純な話でしょう。

殺したら殺してもいい、殴ったら殴ってもいい、人が何か悪いことをしたら、絶対に忘れないで、その恨みをずーっと持ち続けて、いつか仕返ししてやるぞ、という思考は、とんでもない「暴力主義」ですよ。

あの宅間という犯罪者が昨日かおとといか、処刑されて死んだんですね。新聞に、異例に早く処刑が実行されたと載っていました。そこでマスコミの人たちが被害者の方々の家に行って「感想はいかがでしょう」と聞く。その感想を聞くことだけでも、怖ろしいことです。聞かれた人々は「ほっとしました」と言う。この「ほっとしました」というひと言を聞いた途端、私は「やっぱり被害者の方々も暴力主義者だよ」と思ったのです。

人が死んで「ほっとする」ってどういうことですかね。どうせその人は逮捕されて、社会に戻るわけじゃないし、社会に戻っても二度と同じことはしないし。その人を殺したからといって、あの被害者の子供たちがまた生き返ってくることは決してないのに。起きた損は、どうせ取り戻せないのです。そのまま損なだけ。だから「子供たちにも長生きする業がなかったでしょうし、我々にもそれなりの不幸な業があったでしょう。その一個の不幸だけで十分です」と、心を穏やかにした方がいいのに。

まあ、穏やかにしていたと思いますけど、マスコミがどんどん来て、無理やり、穏やかにしていた心をまた掻き回すのです。「処刑されてよかった。殺されて当然だ。これからはしっかりと死刑を実行するべきだよ」と、マスコミが被害者の方々に言ってほしいのです。その言葉を取って流したいのです。だからマスコミ自体が、ものすごい暴力主義です。

ニュースを取りたくて、いくらでも人の心の邪魔をするんだから。

世界は、ものすごい暴力主義なのです。そのせいで、何一つもうまくいかない。お互いに仲良くすることができない。

「だってあの人が怒ったんだから」

私たちは何かちょっと気に入らないことを言われるとどうしますか？すぐ言い返しちゃう。「だってあんたがそんなひどいことを言ったんだから、私は言い返したんだよ」と正当化する。そこなんですよ、暴力主義は。たとえば人が「あんたバカじゃないか」と言うと、「人に向かってバカとは何だ、バカはお前だろ」と言い返すでしょう。言い返したい心が、もう完全に暴力主義なのです。

「あなたは どうして怒ったのですか」と聞いてみると、「だってその人が私に怒ったんだから」と言う、その微妙なところで、我々は極端な暴力主義者なのです。今は自分には力がないから人を殺そうとは思わないだけで、アメリカのブッシュ大統領くらいのすごい権力と軍事力を握ったならば、同じなのです。相手をやっつけちゃう。何千人でも何万人でも。

だからお釈迦様は、心の中の暴力主義を取り除いて、人を助ける気持ちに入れ換えて下さい、とおっしゃいます。

怒りは心の病気

誰かが私に「あんたバカではないか」と言うなら、私はよく知っています、その人は何か怒ってるんです。その人は何か悩んで、心が病気なのです。まあ私は本当にバカかもしれませんが、だからといって、そんなことは人に向かって普通は言わないでしょう。それは社会の常識だから。面と向かって「あんたはこうだ」と言ってしまうと、それは明らかに失礼。明らかに失礼な言葉を使う時は、言う人自身にちょっと問題がある。その人が、病気なのです。

姑さんがお嫁さんをいじめる場合でも、姑さんがちょっと病気なのです。「お嫁さんに息子も立場も財産も、全部奪われるんだ。息子は私のものなのに」と。その考え方がおかしい。病気です。お嫁さんに全部奪われるのは当たり前です。自分の息子も家も孫たちも、お嫁さんのものでしょう。

心正しい姑さんだったら、「ああ、私は今日から隠居だ。では息子も

家もよろしく願います。何か分からないことがあったら教えてあげますよ」ってくらいの心でいたら楽になるんですよ。相手は若い女の子だから、「お母さん、これどうやるんですか、これはどうですか」としょっちゅう聞いてくれるし、それですごく仲良く楽しく生活できます。そういうふうに行っている人々も結構いますからね。自分の娘よりもお嫁さんの方が好きでかわいくて、娘なんか行くと、「お前は何しに来たんですか」と怒ったりして。

誰かの考え方がちょっと病気になっちゃうと、何かちょっと言ってしまうのです。

暴力主義から足を洗う

それで私に何か言った人に、私が「なんで人に向かってそんな失礼なことを言うのか」と言い返しても、相手に通じるわけないでしょう。そんなことが分かってるんだったら言わないでしょう。

そうではなく、「あなたはちょっと心が痛んでるでしょうねえ。何か悩んでるでしょうね」とか、「何か嫌なことでも私がしたんでしょうか」などと言ってその人の心を慰めてあげる。これは、仏陀の道なのです。

あるいは「まあそんなことをみんなの前で言うとあなたの立場がなくなりますから、ちょっと二人で後ろに行きましょう。そこで言いたい放題言ってください」と、そう言っただけでも、本人の心は治るんですよ。

「これはあなたにとってちょっとまずいんだ」と心配している気持ちがすぐに分かるのです。そうやって、怒って心が病気になっている相手を助けてあげる、親切にしてあげる。暴力主義を止める。

それだけでもやってみれば、この世界はすぐに良くなります。戦争なんかは完全になくなります。「平和、平和」とプラカード立ててパレードに行っても、そんなのは全然平和になりません。問題は心です。プラカード立てて平和運動やってる人も、結局は暴力主義者なのです。戦争をする人々を脅してやるぞという気持ちですから。

暴力主義は、この心の中にあるのです。みんな暴力主義を持っています。お釈迦様は「それを、取り払って下さい。取り払って、苦しんでいる人を助けましょう」とおっしゃるのです。人が自分を殴りに来るんだったら、その人は病気で何か問題があるのですよ。ですから、人を殴ったりしたらその人にとってもいいことじゃないし、「どうしてそんな気持ちになったんでしょうかねえ」などと、何とかその人を助けてあげた方がいいのです。

黒澤明監督の何かの映画にちょっとした場面があったのです。貧しく

てすごく苦労しているような所に住んでいる、大工か何かやっている人の家に泥棒が入るのです。その人は泥棒が今入っていると知っていて、その泥棒が知り合いのあいつだとも知っている。で、泥棒が何か持って行くんですけど、この人は寝ているまま。窓なんかなくて、簾一枚かかっているような家で、泥棒がそこから出て行く。その人は寝ているんですけど、泥棒が出て行こうとすると、「お前、帰る時はそれ閉めて行け。寒いんだから」と言うのです。それで泥棒した人は、この人が起きていたのかとびっくりするんですけど、そのまま出て行って、警察に逮捕されちゃうんです、品物を持ったまま。警察はその大工さんを連れてきて、「これはお前のものを盗んだんじゃないか」と聞く。その人は「いえいえ、私はあげたのです」と言って、同じ生活をする仲間だから助けてあげる。

ちょっとした場面ですが、すごく立派なのです。黒澤さんの作品はどれも立派ですけど。

それが、お釈迦様のおっしゃっている道なんですよ。人を裁いて罰を与えるんじゃないで、仕返しするんじゃないで、「そいつは病気だから、やっぱり助けてあげる」という思考です。

三つのキーワードを使って幸せになる

この三つの思考の汚れに気を付ける。

一番目は、「欲」の代わりに「みんな置いて去るものだ」と思うこと。

二番目は、落ち込んだり怒ったりしないで、穏やかにいること。

三番目は、暴力主義を捨てて、人を助ける気持ちに入れ換えること。

それをちょっと実行してみれば、幸福で豊かな生き方が、すぐにできます。それでまた、やっぱりお釈迦様ってなんて素晴らしい方でしょう、と分かります。

ほんの僅かのことで、仏陀の言葉を実践することを頑張っていただければ、大変ありがたいことです、と期待して、お話を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(文責・藤本竜子)